

議会選挙から見る ラテンアメリカ「政党システム」の変化と持続性

「左傾化」現象解明への一試論

上谷直克

はじめに

2005年から2006年にかけてラテンアメリカは「選挙の季節」を迎えている。大統領選だけ挙げてみても、昨年(2005年)はホンジュラス、チリ、ボリビア、そして今年(2006年)にはコスタリカ、ハイチ、コロンビア、ペルー、メキシコ、ブラジル、ニカラグア、エクアドル、ベネズエラと、まさにめじろ押しといった感がある。そしてこのような選挙の多さとともに、選挙結果も反映して、ここ数年のラテンアメリカ政治を特徴づけるのが、いわゆる「左傾化」と呼ばれる現象である。この現象は、各種国政選挙において、左翼系の候補・政党が、大統領・議会選の双方で躍進している結果を受けて、広く認識されるようになったものである。しかし、この「左傾化」という表現が、現在のラテンアメリカ政治の一傾向を捉えたキー・ワードであるとはいえ、若干言葉が独り歩きしている観がある。

表1は2005年から2006年にかけてラテンアメリカ地域で実施された大統領選の最終結果をまとめたものである。ここで注目すべきは、表の右端に示した当選候補者と次点候補者との「得票率差」である。この数値からは、これほどメディアにおいて「左傾化」が叫ばれているにもかかわらず、左派系候補による圧倒的な勝利(ボリビア)はむしろまれ

であること、また、たとえ左派候補が勝利した場合でも、それは概して次点候補との接戦の末の勝利であった(チリ、コスタリカ、ペルー)という点が浮かび上がる⁽¹⁾。

とはいえ、おそらく「左傾化」といった地域的または社会的な志向性を、大統領選の結果だけで読み取るのはあまりにも部分的である。実際、1990年代の民主化論の延長線上で展開されてきた「統治形態論(大統領制か議院内閣制か)」や、それに触発されたラテンアメリカ地域内の「多様な大統領制」論が活発になるにつれ、これまで度々繰り返されてきた「強力な大統領と脆弱な議会」というあまりにも偏ったイメージでは、現実の政治を的確に捉えられないとの認識が強まってきている(Smith[2005, 156-182])。したがって、ここでは、大統領選の結果のみでは読み取れない、社会の多様な利益や意見の動態をよりの確に反映する議会選挙の結果に基づいて、ラテンアメリカ各国の「政党システム⁽²⁾」の変化を概観し、近年の「左傾化」現象に迫ることにしたい。なお、本稿の分析においては、各国の政治状況を個別的に論じるのではなく、ラテンアメリカ地域全般を視野に入れ、各国の事例を通事的かつ共時的に比較するという手法をとる。また、T.ペトコフやJ.カスタンエーダらの議論のように「左傾化」という現象を規範的・思念的に記述するのではなく(Petkoff[2005]; Castañeda[2006])、それを可能な限り「目に見える」

表1 ラテンアメリカ各国の大統領選挙結果(2005~2006年)

国名	投票日	勝者	分類	得票率(%)	次点候補	分類	得票率(%)	得票率差(ポイント)
ホンジュラス	2005.11.27	J.M.セラヤ	CR	49.9	P.ロボ	CR	46.2	3.7
ボリビア	2005.12.18	E.モラレス	L	53.7	J.ラミレス	CR	28.6	25.1
チリ	2006.1.15	M.パチェレ	CL	53.5	S.ピニェラ	CR	46.5	7.0
コスタリカ	2006.2.5	Ó.アリアス	CL	40.9	O.ソリス	P	39.8	1.1
ハイチ	2006.2.7	R.ブレヴァル	C	51.2	L.マニガ	P	12.4	38.8
コロンビア	2006.5.28	Á.ウリベ	CR	62.2	C.ガヴィリア	CL	22.0	40.2
ペルー	2006.6.4	A.ガルシア	CL	52.6	O.ウマラ	P	47.4	5.3
メキシコ	2006.7.2	F.カルデロン	CR	35.9	A.ロベス・オブラドル	CL	35.3	0.6

(注) (1) 今後(2006年9月末時点), 大統領選が予定されているのはブラジル(10月1日, 決選投票10月29日), エクアドル(10月15日, 決選投票11月26日), ニカラグア(11月5日), ベネズエラ(12月3日)である。

(2) 本稿に使用される政党の分類については, 1995年までに存在していたものについてはM.クピッジ(Coppedge[1997])の分類を使用し, それ以降創設された政党については, 以下の表Aのような彼による分類基準を参考にして筆者が行った。

(3) 表中の「左派(L)」もしくは「中道左派(CL)」と目される候補者が勝利した事例。

(出所) 各国政府ホームページおよびPsephos: Adam Carr's Election Archive (<http://psephos.adam-carr.net/>)のデータをもとに筆者作成。

表A 政党分類の基準

右派(R)	<ul style="list-style-type: none"> 中間および下層階級にアピールするために自らの言説を穏健化させることはなく, 専ら19世紀以来の伝統的エリートの後継者たちをターゲットとする政党。 ファシストおよびネオ・ファシストの言説を用いる政党。 保守的な言説(寡頭主義, 権威主義, エリート主義, 過去の賞賛など)を有し, かつ, 個人独裁主義的でない(かつての, または現在の)軍事政権関係者により支援される政党。
中道右派(CR)	<ul style="list-style-type: none"> 民間セクターとの協調, 公秩序, 清廉な政府, モラル, 「分配よりも成長の重視」などを強調することによって, 上層の有権者に加えて中・下層階級をもターゲットとする政党。
中道(C)	<ul style="list-style-type: none"> これといって顕著な経済・社会的アジェンダをもたず, 古典的な政治的自由(広範な政治参加, 市民的美徳, 法の支配, 人権, 民主主義)を強調する政党。 (自らが策定・実施する)諸政策が(立場上は)左右へとブレているため, 選挙と選挙の間で一貫した志向性を見い出すのが難しい政権政党(=与党)。
中道左派(CL)	<ul style="list-style-type: none"> 中間および上層の有権者を遠ざけられないようなやり方で, 公正・平等・社会的流動性(social mobility)・「分配と蓄積との相互補完性」などを強調する政党。
左派(L)	<ul style="list-style-type: none"> マルクス主義イデオロギー/レトリックを用い, 蓄積よりも分配を最優先するとともに, 資本家や帝国主義者による労働者の搾取を強調し, 社会経済的不公正を正すべく国家の強力な役割を唱導する政党。時に暴力を適切な闘争手段として見なす場合がある。社会主義知識人でない中間・上層有権者を遠ざけるのも厭わない。
個人主義政党(P)	<ul style="list-style-type: none"> 特定の主義や綱領よりも, リーダーのカリスマ性や権威をアピールする政党で, かつ, あまりにも曖昧で一貫性に欠けるため, 他のどのような類型でも上手く分類できないもの。 無所属。 ある特定の候補者を支持するための雑多な選挙同盟。
その他(O)	<ul style="list-style-type: none"> 左右という軸で分類不可能であるが, ある特定のイデオロギー, プログラム, 主義主張, 地域, 利害, もしくは社会集団などを代表するあらゆる政党。
不明(U)	<ul style="list-style-type: none"> 政党名以外の情報入手が不可能で, 名称によってはその志向性がわからない政党。例えば, 「Comunista」や「Izquierda」はほぼ明らかに左翼政党を指し示すと考えられるが, 「Socialista」は必ずしもそうではない。他のあまり役に立たないラベルとして, Revolucion(ario), Demócrata, Radical, Liberal, Laborista, Social, Popular, Auténtico, Republicano, Renovador, Independiente, Agrarioなどが挙げられる。

形にできるよう、比較政治学の分野で考案されてきたいくつかの数値指標を利用する。

I 議会選挙から見る政党システムの変化

民主政治のルールそれ自身が不安定で、かつ、経済・社会的な混乱期であるほど、政党または政治エリート内の「党派性」や「党利党略」の重要性が増大すると言われている(Philip[2003, 125-130])。とりわけ、これまでのラテンアメリカ政治分析では、強大かつ支配的な政治アクターとしての大統領に焦点が絞られがちであったが⁽³⁾、そもそも彼(彼女)が自らに付与された憲法上のさまざまな権限(constitutional powers)を十全に発揮し、平穩無事に政治の舵をとるためには、それを背後から過不足なく支える党派的な力(partisan powers)が決定的に必要とされる⁽⁴⁾。これこそが、大統領それ自身に対してと同程度に「政党」という形で具現化される「党派性」や「イデオロギー傾向」に対して関心が払われるべき所以である。

このような観点から、ここでは大統領選挙についての分析とは違った角度からラテンアメリカの「左傾化」の実態を探るべく、いわゆる民主化の波が席卷した1980年代半ば以降の政党、特に、さまざまな政党のパターン化された相互関係である「政党システム」の変化について考えてみることにする。

これまで比較政治学において展開されてきた政党システム論といえ、例えば政党システムの歴史の変遷や社会的亀裂との対応関係、もしくはより実証的に、政党の数や政党間の協調と競合の形態に基づいた類型化などが中心的なテーマであった。そして、西洋諸国との相違点が強調されながらも(Dix[1989]), ラテンアメリカ地域研究にもこのようなオーソドックスな見方が導入され、例

えば「一党優位制のメキシコ、二党制のコロンビア、穏健的多党制のチリ……」といった類型化が試みられる一方で、概してラテンアメリカの政党(システム)が「過度にプラグマティック、恩顧主義的、個人主義的、移り気、そして首尾一貫性がなく、それゆえ脆弱(Coppedge[1998, 547])」だとするような通念が形成されてきた。

しかし、とりわけ民主化以降著しいラテンアメリカ政治の流動性を理解するには、これまでの「数」や「類型」といった静態的な政党システムの捉え方に加えて、各国ごとの、しかも時間的な経過(時系列)をより意識した動態的な分析も必要とされるだろう。そこで以下では、1990年代半ばから現在までの約10年の間にラテンアメリカ諸国で実施された議会選挙(下院議員選挙)の結果をもとに、①有効政党数(Effective Number of Parties by Seats: ENPS)、②変易率(Volatility)、③累積得失票率、④イデオロギー傾斜度(Mean Left-Right Position: MLRP)とその分極度(Index of Polarization: IP)などの指標を示し、「左傾化」も含めた近年のラテンアメリカ政治の傾向を示す。

II 有効政党数(ENPS)

まずここで見る有効政党数とは、ただ単に「議会選挙に参加した政党の数」でも「選挙により議席を得た政党の数」でもなく、政党の頭数を議席占有率(または選挙における得票率)という「規模」を表す尺度で加重することによって、議会で実質的にキャスティングボードを握り得る政党の数を把握するための指標である⁽⁵⁾。この指標を見ることで、一般的にラテンアメリカ政治に対して抱かれがちな「異常なほど多数の政党=不安定」というイメージが実際どれほど適切であるのかを再考し、また概して「左傾化」というイメージが惹起しやす

い「左派系大統領によるラディカルな政策転換」という懸念の妥当性を検討することができる。

表2から最も顕著に読み取れるのは、第Ⅱ期において(その伸び幅はまちまちであれ)多くの国で平均して有効政党数が増加しているということである。しかし、このような「平均値」だけにとらわれるのではなく、特にここ最近の数値の変動を見てみると、例えば、両時期の平均値に変化があった

とはいえ、実のところチリ、ペルー、アルゼンチン、コスタリカ、メキシコでの変化は微々たるものであった。そして、ブラジル、エクアドル、コロンビアでこのところ急激な増加が見られる一方で、ベネズエラやボリビアのように同時期においてこの有効政党数が著しく減少した国も存在する。

このような有効政党数の増加をポジティブに捉えたと、まずその増加は社会に対する各政党の代

表2 有効政党数(ENPS)

国名	第Ⅰ期(1980~90年代半ばまで)の平均	第Ⅱ期(1990年代半ば以降)の平均	①	②	③	④	⑤	⑥
ブラジル	6.5	7.9 6.5 ↗	6.3 8.2	6.0 7.1	8.5 7.2			
エクアドル	5.7	5.8 4.0 ↗	5.9 2.9	4.8 3.3	5.3 4.2	7.2 5.2		
チリ	4.8	5.4 3.9 ↗	4.9 3.6	5.3 3.5	5.9 4.6	5.3 4.2		
コロンビア	2.8	4.2 2.9 ↗	2.6 1.6	3.2 1.4	7.2 2.7	7.6 6.0		
ベネズエラ	3.0	4.1 2.7 ↗	4.7 4.1	5.7 3.8	3.8 1.8	2.0 1.1		
ボリビア	4.1	4.0 2.8 ↘	3.3 2.2	5.4 4.6	5.0 4.1	2.4 1.6	2.8 1.5	
ペルー	3.8	3.7 2.2 ↘	2.9 1.3	3.8 2.1	4.4 2.7	3.8 2.8		
アルゼンチン	2.8	3.0 1.7 ↗	2.8 1.6	2.5 2.0	2.6 2.0	2.8 1.7	3.9 1.8	3.4 1.3
コスタリカ	2.5	3.0 2.4 ↗	2.3 2.0	2.6 2.1	3.7 3.3	3.2 2.2		
ウルグアイ	3.2	2.9 2.5 ↘	3.3 3.2	3.1 2.5	2.4 1.8			
メキシコ	2.5	2.7 2.0 ↗	2.3 1.4	2.8 2.0	2.5 2.2	3.0 2.2	3.0 2.4	

(注) (1)並び順は第Ⅱ期の数値に基づく降順。

(2)表中の①, ②, ③は表の複雑化を避けるべく付されたものであり、1993年以降の各国の選挙回数に対応している(例えばブラジルであれば、①=1994年、②=1998年、③=2002年)。また、↗記号は有効政党数の平均値が民主化後第Ⅱ期(1990年代半ば以降現在まで)において、第Ⅰ期(1980年代から90年代半ばまで)よりも増加した国を示し、同様に↘記号はそれが減少した国を示している。

(3)下段の数字はモリナールの公式による有効政党数。詳しくは文末注(5)参照。

(出所)筆者作成。ただし第Ⅰ期の平均値についてはクピッジの研究を参照(Coppedge[2001, 175])。

表性・応答性(レスポンスビリティ)の高まりを表す。また、政策形成とその法制化というプロセスにおいて、ますます多くの政党による協調が必要になるという意味で、政策の穏健化を助長する可能性を高めるといえる⁽⁶⁾。しかし、これをネガティブに捉えると、議会勢力内におけるいわゆる拒否点の増加によって、政策形成の遅延や政策内容の骨抜き、時には政権の不安定化につながりやすいといえるだろう。一方で、有効政党数の減少は、その増大時と比して、とりわけ(連立)与党の説明責任(アカウントビリティ)を高め、政策内容の一貫性と効率的な政策運営をかなりの程度確保するであろうが、少数の政党による寡占・独占が強まるにつれてラディカルな改革への歯止めが効きにくいという問題を生じさせる。

ラテンアメリカの大統領制がもつ危険性を指摘したこれまでの議論では、「大統領制+過度の多党制」という組み合わせが専ら懸念され(Valenzuela and Linz[1994])、四つ以下の政党から成る「断片化されていない政党システム」こそが、連立を組み、またそれを維持するのに容易だとされてきた(Mainwaring and Shugart[1997a])。しかし、ボリビアやベネズエラのように、ラテンアメリカでも極端に有効政党数が減少している事例が生じつつある現在、従来の議論では想定されなかった新たな状況が生じていると言えるのかもしれない。

III 変易率 (Volatility)

次に「変易率」である。この指標は、ある時点(t)の選挙から次の時点(t+1)の選挙までにそれぞれの政党が被った得票率の差に基づいて計算される⁽⁷⁾。つまりこれは、二つの選挙の間に全体としてどれほどの票の移動が見られたのかを表す指標である。例えば、ある国のある期間の変易率が

50%を示した場合、それは、ある選挙(t時)の投票者の50%が、次の選挙(t+1時)では前回の選挙時と違う政党に投票したことを意味する。

この変易率に関しては、近年、政党システムの「制度化」の程度を測る一つの重要な指標として注目されており(Mainwaring and Scully[1995])、また一方で、その数値の変化にいかなる要因(経済的変動、政治制度、社会的亀裂)が影響を与えるのかについての研究も進んでいるが(Madrid[2005])、紙幅の都合によりここでそれらの議論には立ち入らない。いずれにせよ、「制度化の程度」の代替尺度としてこの指標に着目する議論からすると、この数値の高まりは、政党の社会的基盤が脆弱であることと捉えられ、有権者による特定の政党への持続的な支持や一体感が弱まっていることを示すものとして理解される。さらに、政党と社会との関係がきわめて流動的である上に、経済・社会的な変動や危機に直面した場合には、既存の秩序の打破や変革を標榜しつつ、理性よりも感情に訴えかけるような政治スタイルをとりがちな、「アウトサイダー」や「ポピュリスト」と称されるたぐいの政治家が横行しやすく、それゆえ政治・経済的不確実性が高まるとされる。

そこで、近年のラテンアメリカ各国の平均変易率について見てみると、いくつかの傾向が見られる。まず、ペルーやボリビアなど近年数値が減少しつつある国もあるが、アンデス5カ国は第I期から引き続いて概して高い変易率を示している。とりわけ、後述するように、このところ「左傾化」をますます強めるベネズエラと、反対に、「右傾化」傾向が高まりつつあるコロンビアの両国において、ともに変易率が増加しているのは印象的である。しかしその一方で、かつては変易率が非常に高く、それゆえ政党システムの制度化の程度がきわめて低いとされていたブラジル(Mainwaring[1999])、

そして、長期間の一党優位制から脱して、当初は流動化傾向が強まるかに見えたメキシコの両国において変易率の減少・安定化が見られることは興味深い(Klesner[2005])。また、それとは逆に、ラテンアメリカ政治をめぐるこれまでの通念では、政党システムの制度化が高度に進んでいると考えられてきたコスタリカやウルグアイにおいて、両国における近年の「二大政党制離れ」を反映して、変易率の微増傾向が見られるようになっている。

むしろ、ラテンアメリカではそもそもこれまでの変易率が比較的高かったこと、また、同時期において政党に対する信頼度や親近感についてこれといった改善が見られていないことなどを考慮すると、近年の変易率の減少傾向をそのまま「政党システムの制度化の高まり」として理解するのは時期尚早であろう。しかし、少なくとも表3第Ⅱ期のアルゼンチン以下の国々の数値については、いわゆる先進国や中進国と分類される国々のそれと比較しても遜色がないことをかんがみると⁽⁸⁾、

ラテンアメリカの政党システムが顕著に不安定だとする従来のイメージについては、なんらかの修正がなされるべきなのかもしれない。

IV 累積得失票率

- - 1990年代半ば以降の「勝ち組」と「負け組」

ここまでで見たラテンアメリカ政党システムの一般的な特性が、政党の数やシステム自体の変易率という、いわば「左傾化」の構造的背景に関わるものであったのに対して、以下では各国・各政党(システム)の内実、特にそのイデオロギー傾向により配慮しつつ「左傾化」現象の実態に迫ってみよう。

まず注目したいのが「累積得失票率」という指標である。この累積得失票率とは、文字どおり、一定期間内における各政党の得失票率の総和のことを指し、これによって、ある期間中に有権者の支持を伸ばしたいわば「勝ち組」政党と、その一方で、

表3 二つのサンプル期間における平均変易率

国名	サンプル期間Ⅰ	平均変易率(%)	国名	サンプル期間Ⅱ	平均変易率(%)
ペルー	1980～95	86.0	ベネズエラ	1993～2005	44.0 ↗
ブラジル	1982～94	64.3	ペルー	1995～2006	42.8 ↘
エクアドル	1979～94	61.4	ボリビア	1993～2006	42.4 ↘
ボリビア	1980～93	53.4	コロンビア	1994～2006	41.1 ↗
ベネズエラ	1978～93	42.8	エクアドル	1994～2002	30.7 ↘
アルゼンチン	1983～95	37.0	アルゼンチン	1995～2005	27.3 ↘
メキシコ	1979～94	36.4	コスタリカ	1994～2006	24.5 ↗
コロンビア	1982～94	27.0	ウルグアイ	1993～2004	18.5 ↗
チリ	1973～93	24.8	ブラジル	1994～2002	15.0 ↘
コスタリカ	1982～94	23.9	メキシコ	1994～2006	14.3 ↘
ウルグアイ	1971～93	17.7	チリ	1993～2005	10.6 ↘

(注) (1) 並び順は各サンプル期間ごとに降順。また、↗記号は平均変易率がサンプル期間Ⅱにおいて、サンプル期間Ⅰよりも増加した国を示し、同様に↘記号はそれが減少した国を示している。

(2) 選挙統計の不備により、エクアドルの数値については得票率でなく議席率で算定している。また、これ以降言及するエクアドルの各指標についても、得票率に基づいて算定される場合には同じく議席率を使用する。

(出所) 筆者作成。

表4 国政選挙での勝ち組（1982～95年）

国名	政党名	立場	与党経験	創設年	累積得票率(%)
ペルー	変革90 (CAMBIO90)	P	あり	1990	52.1
アルゼンチン	フレパソ (FREPASO)	CL	なし	1993	20.9
ベネズエラ	急進大義 (CAUSA R)	CL	なし	1971	20.4
エクアドル	キリスト教社会党 (PSC)	R	あり	1951	17.8
ブラジル	ブラジル社会民主党 (PSDB)	CL	なし	1988	17.1
エクアドル	ロルドス主義者党 (PRE)	P	あり	1983	16.8
メキシコ	民主革命党 (PRD)	CL	なし	1989	16.7
ボリビア	国民革命運動 (MNR)	CR	あり	1941	15.4
メキシコ	国民行動党 (PAN)	CR	なし	1929	14.3
ボリビア	愛国良心党 (CONDEPA)	P	なし	1989	14.3
エクアドル	ベラスコ主義国民党 (PNV)	P	なし	1952	14.2
ボリビア	連帯市民連合 (UCS)	P	なし	1989	13.8
ベネズエラ	国民一致 (CN)	P	なし	1993	13.8
ウルグアイ	拡大戦線 (FA)	L	なし	1971	12.5
チリ	民主主義のための政党 (PPD)	CL	あり	1987	11.8
コスタリカ	キリスト教社会連合党 (PUSC)	CR	あり	1983	11.3
エクアドル	人民民主党 (PDP)	CL	なし	1978	8.2

(注) アミ掛けは左派(L)もしくは中道左派(CL)政党。

(出所) Coppedge [2001, 185, Table 3] を筆者が加筆・修正。

表5 国政選挙での負け組（1982～95年）

国名	政党名	立場	与党経験	創設年	累積得票率(%)
ボリビア	人民民主連合 (UDP)	CR	あり	n.a.	-38.7
ブラジル	社会民主党 (PDS)	R	あり	1979	-37.2
ペルー	人民行動党 (AP)	C	あり	1956	-36.3
エクアドル	人民勢力結集 (CFP)	P	あり	1947	-28.8
アルゼンチン	急進党 (UCR)	C	あり	1891	-25.9
メキシコ	制度革命党 (PRI)	C(CR)	あり	1929	-23.9
ブラジル	ブラジル民主運動党 (PMDB)	C	あり	1981	-23.4
ボリビア	民族民主行動党 (ADN)	C	あり	1979	-22.0
ペルー	アブラ党 (APRA)	CL	あり	1924	-20.5
コロンビア	コロンビア保守党 (PCC)	CR	あり	1849	-18.8
ベネズエラ	キリスト教社会党 (COPEI)	CR	あり	1946	-17.2
ベネズエラ	民主行動党 (AD)	CR	あり	1941	-16.4
コスタリカ	国民解放党 (PLN)	CL	あり	1951	-10.5
ウルグアイ	国民党 (PN)	CR	あり	1835	-8.8
エクアドル	民主左翼 (ID)	CL	あり	1967	-8.5
ブラジル	国家革新党 (PRN)	P	あり	1988	-8.5
ウルグアイ	コロラド党 (PC)	C(CL)	あり	1836	-8.4

(注) アミ掛けは左派(L)もしくは中道左派(CL)政党。

(出所) Coppedge [2001, 185, Table 3] を筆者が加筆・修正。

それを失った「負け組」政党のそれぞれの特性上の傾向が明らかとなる。

そもそもこのような各国政党内の「勝ち組」と「負け組」という観点は、1982年から95年までの時期を対象としてM.クピッジが行った研究に依拠しているが(Coppedge[2001]), その後約10年間の時期を対象とした、それに類した研究は存在していない。したがってここでは、まず彼の議論に言及し、それを95年以降最近までの時期の選挙結果に基づきつつ筆者なりに敷衍する。

クピッジは民主化以降最初の約15年間(1982-95年)における累積得失票率の±8%を基準として「勝ち組」と「負け組」とを選び出し、それぞれの組に分類される政党に共通するいくつかの特徴を指摘した。

それらの特徴とは、第1に、この時期に「負け

組」に属した多くの政党が、在任期間の差こそあれ、同時期に「与党(大統領の所属政党および連立与党)」を経験した政党であったということ。第2に、創設年が古いいわゆる伝統政党のなかで「勝ち組」となったのは、概して「右派(R)」もしくは「中道右派(CR)」に分類される政党であったということ。そして第3に、近年創設された新しい政党のなかで「勝ち組」となったのは、「個人主義政党(P)」か、もしくは「中道左派(CL)」に分類される政党であったということである。

すなわち、彼の見るところ、民主化以降第Ⅰ期の「勝ち組」政党の大勢を占めたのは、概して、個人主義政党、右派の伝統的政党、そして中道左派の新政党にそれぞれ分類されるということである⁽⁹⁾(Coppedge[2001, 186])

それではこのような第Ⅰ期についてのクピッジ

表6 国政選挙での勝ち組(1995~2006年)

国名	政党名	立場	与党経験	創設年	累積得失票率(%)	第Ⅰ期
ベネズエラ	第5次共和国党(MVR)	L	あり	2000	60.0	新参
ボリビア	社会主義運動(MAS)	L	あり	1997	50.7	新参
コスタリカ	市民行動党(PAC)	C	なし	2000	25.3	新参
ウルグアイ	拡大戦線(FA)	L	あり	1971	21.3	勝ち組
コロンビア	国家統合社会党(PSUN)	CR	あり	2006?	16.7	新参
ペルー	国民連帯党(PSN)	CR	なし	1998	15.3	新参
ボリビア	社会民主権力(PODEMOS)	CR	あり	2002	15.3	新参
ペルー	アブラ党(APRA)	CL	なし	1924	14.1	負け組
メキシコ	民主革命党(PRD)	CL	なし	1989	13.2	勝ち組
エクアドル	パチャクティック運動(MUPP-NP)	CL	あり	1996	12.0	新参
コロンビア	急進改革党(PCR)	CR	あり	1998	10.7	新参
チリ	独立民主同盟(UDI)	R	なし	1987	10.2	圏外
エクアドル	国民行動制度革新党(PRIAN)	R	なし	2002	10.0	新参
コスタリカ	自由主義至高運動(ML)	CR	なし	1994	9.2	圏外
メキシコ	国民行動党(PAN)	CR	あり	1939	8.8	勝ち組
コロンビア	新しい民主軸(PDA)	L	なし	2003?	8.2	新参
ベネズエラ	社会民主主義のため(PDS)	L	あり	2003	8.2	新参

(注) (1) アミ掛けは左派(L)もしくは中道左派(CL)政党。

(2) 表6および次の表7の右端「第Ⅰ期」項目は、第Ⅰ期における各政党のステータスを表している。「新参」は第Ⅱ期に初めて現れた政党、「圏外」は第Ⅰ期に存在していたが表4・表5に現れていない政党である。

(出所) 筆者作成。

表7 国政選挙での負け組(1995~2006年)

国名	政党名	立場	与党経験	創設年	累積得失票率(%)	第I期
ペルー	変革90(CAMBIO90)	P	あり	1990	-39.1	勝ち組
コスタリカ	キリスト教社会連合党(PUSC)	CR	あり	1983	-32.6	勝ち組
ボリビア	国民革命運動(MNR)	CR	あり	1941	-28.0	勝ち組
コロンビア	コロンビア自由党	C	あり	1849	-28.0	圏外
ベネズエラ	民主行動党(AD)	CL	なし	1941	-23.7	負け組
ベネズエラ	キリスト教社会党(COPEI)	CR	あり	1946	-22.6	負け組
メキシコ	制度革命党(PRI)	CR	あり	1929	-21.8	負け組
ウルグアイ	コロラド党(PC)	C	あり	1830	-21.8	負け組
アルゼンチン	フレパソ(FREPASO)	CL	なし	1993	-20.7	勝ち組
ベネズエラ	急進大義(CAUSA R)	L	なし	1971	-20.5	勝ち組
ボリビア	民族民主行動党(ADN)	CR	あり	1979	-19.4	圏外
ボリビア	愛国良心党(CONDEPA)	P	あり	1989	-14.3	勝ち組
ボリビア	連帯市民連合(UCS)	P	あり	1989	-13.8	勝ち組
ベネズエラ	国民一致(CN)	P	あり	1993	-13.6	勝ち組
アルゼンチン	急進党(UCR)	C	あり	1891	-12.8	負け組
ベネズエラ	社会運動党(MAS)	CL	なし	1971	-10.5	圏外
エクアドル	キリスト教社会党(PSC)	R	なし	1951	-9.8	勝ち組
コスタリカ	国民解放党(PLN)	CL	あり	1951	-8.2	負け組

(注) アミ掛けは左派(L)もしくは中道左派(CL)政党。
(出所) 筆者作成。

の分析を踏まえて、民主化後第II期の選挙結果に基づけば、いったいどのような傾向が見えてくるのであろうか。

表6・表7を概観すると、第I期で顕著な差を生み出したとされる「与党経験の有無」について一般化は難しそうであるが、それ以外に注目しておくべき特徴としては以下の2点が挙げられるだろう。それは第1に、伝統政党を脅かしながら勝ち続ける拡大戦線(FA:ウルグアイ)、民主革命党(PRD:メキシコ)、国民行動党(PAN:メキシコ)や「敗者復活」を遂げたアブラ党(APRA:ペルー)を除いて、「勝ち組」に含まれる政党の多くが、この第II期の間に新しく創設された政党であったということ⁽¹⁰⁾。そして第2に、第II期において「負け組」に属する多くの政党が、中道(C)および中道右派(CR)の伝統政党か、もしくは第I期に創設されて間もない個人主義政党(P)であったという

ことである。

以上、累積得失票率を見ることで、まず、1980年代の民主化以降現在まで、それまで比較的安定的な地位を占めていた急進党(UCR:アルゼンチン)、制度革命党(PRI:メキシコ)、国民解放党(PLN:コスタリカ)、コロラド党(PC:ウルグアイ)、キリスト教社会党(COPEI:ベネズエラ)といった中道(C)および中道右派(CR)の伝統的政党のきわめて著しい凋落傾向が改めて確認された。またその一方で、個人主義政党(P)や左派(L)・中道左派(CL)の新党の躍進は決して最近のものでなく、比較的長いスパンで、しかも断続的に生じてきた現象だということが浮かび上がったといえる。

V 政党システムの傾きと分極度

最後に、本稿の議論での核心ともいえる、各国

の政党システムが全般的に右・左どちらに傾いているのかを測る「イデオロギー傾斜度(MLRP)」と、各政党が左右軸上でどのように位置しているのかを表す「イデオロギー分極度(IP)」という二つの指標を見てみる⁽¹¹⁾。これらの指標は、各国の各政党を八つのカテゴリーに分け⁽¹²⁾、そのなかの「左派(L)」、「中道左派(CL)」、「中道右派(CR)」、「右派(R)」に分類された政党の得票率を基準に計算される⁽¹³⁾。

まず「イデオロギー傾斜度」を示す表8上段の数値については、例えばそれが正の数で表される場合にはその政党システムが全体としてそれだけ右方向(右派側)に、また、負の数の場合にはそれだけ左方向(左派側)に傾斜していると理解する。そして、下段の数値は「中道(C)」、「個人主義(P)」、「その他(O)」、「不明(U)」という左右軸では分類できない政党の得票率総和であり、したがってこれ自体はイデオロギー傾斜指標ではないが、上段の指標を解釈する際の参考値として示した。つまり、下段の数値が高いほど、上段で示された傾斜数値による分析があくまでも「部分的」でしかないと意味し、少なくとも、その国の政党システムを左右軸に沿ってのみ理解することが困難だということになる。

以上の点を踏まえて表8を見ると、興味深いことに、もしアルゼンチン、コロンビアやエクアドルのように「中道化」もしくは「右傾化」していないのであれば、近年「左傾化」現象と呼ばれる政治潮流のなかにも、実際にはいくつかのパターンが存在することが確認できる。第1に、コスタリカ、ブラジル、ペルーのように文字どおり「右から左」へと傾きが変化したパターン、そして第2に、ベネズエラ、ボリビア、ウルグアイのように「左からさらに左」へと傾きが増大したパターン、そして最後に、チリやメキシコのように、もともと右

表8 各国政党システムのイデオロギー傾斜度(1993~2006年)

ベネズエラ	1993	1998	2000	2005		
	-26.3 16.7	-39.2 24.1	-60.8 20.2	-83.4 16.1		
ボリビア	1993	1997	2002	2005	2006	
	24.6 33.7	6.6 36.0	-22.9 30.8	-34.5 1.3	-37.3 9.2	
ウルグアイ	1994	1999	2004			
	-17.6 33.0	-31.1 32.8	-34.4 12.9			
アルゼンチン	1995	1997	1999	2001	2003	2005
	-32.2 26.9	-18.9 56.9	-17.7 56.4	-25.8 42.7	-24.0 52.5	-22.8 41.8
コスタリカ	1994	1998	2002	2006		
	-4.7 6.3	0.7 12.7	5.1 31.0	-10.6 39.6		
ブラジル	1994	1998	2002			
	6.6 21.8	5.3 18.3	-7.9 17.6			
ペルー	1995	2000	2001	2006		
	3.5 71.7	4.3 80.4	4.7 52.6	-0.9 50.4		
チリ	1993	1997	2001	2005		
	3.8 30.5	10.6 25.8	20.8 20.4	15.1 22.9		
メキシコ	1994	1997	2000	2003	2006	
	29.1 1.8	19.6 4.5	28.4 1.2	23.9 5.7	15.5 4.8	
コロンビア	1994	1998	2002	2006		
	4.5 68.4	11.3 67.7	5.3 56.7	21.4 27.3		
エクアドル	1994	1998	2002	2006		
	36.4 20.8	22.0 30.5	16.1 25.6	23.0 21.0		

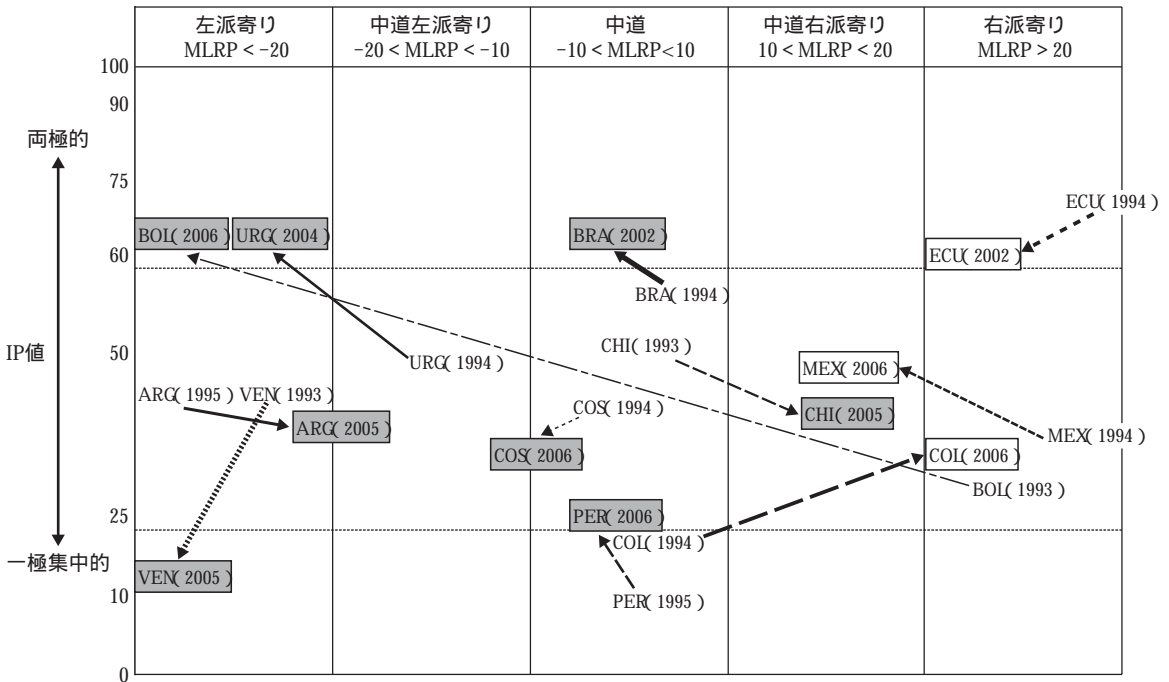
(注) (1)アミ掛けは左隣の年次から数値が減少した年(左に傾いた年)に付してある。したがって、政党システムとして右に傾いている場合でも、その数値が減少したことによってアミ掛けが付される点に注意。

(2)上段の数値はイデオロギー傾斜度。

(3)下段の数値は、左右軸では分類できない政党の得票率総和。

(出所)筆者作成。

図1 第Ⅱ期ラテンアメリカにおけるイデオロギー傾斜度(MLRP)とイデオロギー分極度(IP)の変化



(注) 最新年次の「左派」政権はアミ掛け, 「右派」政権は囲み。

ARG: アルゼンチン, BOL: ボリビア, BRA: ブラジル, CHI: チリ, COL: コロンビア, COS: コスタリカ, ECU: エクアドル, MEX: メキシコ, PER: ペルー, URU: ウルグアイ, VEN: ベネズエラ。

(出所) 集計データをもとに筆者作成。

側に傾いていた状態から中央の位置に戻るべく左へ動いた, すなわち「中道化」という意味で「左傾化」したパターンの3種類である。

次に, このような「イデオロギー傾斜度」を横軸にとり, イデオロギー分布の偏り方を表す「イデオロギー分極度」を縦軸に示したのが図1である。

このイデオロギー分極度とは政党システムの相対的な中心(文末注(11)のMLRP値)からの獲得票の離散度を示し, 右派(R)か左派(L)のどちらか一方にすべての票が偏った場合を示す「0」から, 右派(R)および左派(L)の両者が50%ずつ獲得した場合を示す「100」までの値をとる。ラテンアメリカ

各国の政党システムについての時系列分析によると, 左派(L)・中道左派(CL)・中道右派(CR)・右派(R)のどのイデオロギーブロックも50%以上の議席を占めず, それゆえにブロック間の適度な競争がなされ得る分極度レベルはIP値25から60の間とされる(Coppedge[2001, 181])。なお, 図の複雑化を避け, かつ, 各国の政党システムの変動を捉えやすくするために, ここでは各国における第Ⅱ期最初の選挙時の位置と最新の選挙時の位置のみが示されている。

この図からも近年における各国政党システムの多様な変化が推察できるが, なかでも特に注目

値するのは、上で見た三つのパターンからすると「右から左」もしくは「左からさらに左」へと「左傾化」した国々の間でイデオロギー分布がさまざまであるという点である。確かに、イデオロギー傾斜の程度からすれば、現在(2000年代)のアルゼンチンとコスタリカは中央よりも左側に、そして、ウルグアイ、ボリビア、ベネズエラはどれも表の最左部に位置している。しかし、イデオロギー分極度からすると、アルゼンチンやコスタリカではそれが適度な値の範囲内に位置し、また、「両極的」なウルグアイやボリビアではイデオロギー対立の左右分極化が進むと考えられるなかで、「一極集中的」に分類されるベネズエラでは左派への収斂化が進んでいることが理解できるのである。これは、近年の「左傾化」現象において、ベネズエラのH.チャベスとそれが率いるMVRが占める特異な位置を顕著に表しているといえるだろう。

おわりに

以上のような分析から、近年のラテンアメリカ政治の「左傾化」が語られる際に、注意しておくべきいくつかの点が浮かび上がった。

その一つは、現在生じている現象は、早くも1980年代の民主化以降から一貫して続いてきた「伝統政党の凋落と新政党の叢生」という大きな流れの一局面であり(恒川[2004, 18])、そこでは往々にして既得権益層を指弾する新しい「左派」政党や個人主義政党が、経済・社会構造の急激な変化により「断片化した社会」でますます増大する「原子化した個人」を巧みに取り込む形で興隆したのであった(Roberts[2002])。もちろん、例えば社会民主権力(PODEMOS:ボリビア)、国家統合社会党(P SUN)・急進改革党(PCR:ともにコロンビア)、市民行動党(PAC:コスタリカ)、民主革命党(PRD:

メキシコ)など、現在有力な新政党が今凋落しつつある伝統政党からの分派であったことを考慮すると(単なる党名変更の場合も含めて)これらの新政党の実質的な新奇性には疑問の余地があるということも留意しておかねばならないだろう。

そして、もう一つの注意点は、いくつか「右傾化」する国を除いて、確かに多くの国でなんらかの「左傾化」傾向が認められはするが、実はそのような「左傾化」現象には、厳密にはいくつかのパターン(右派から中道右派・中道へ、中道右派から中道左派へ、中道左派から左派へ)が並存しているということである。確かに、近年の「左傾化」現象のなかにいくつかの「左翼」の存在を指摘することは、カスタンニューダやペトコフらの議論を踏まえれば決して新しい発見ではないが、今回の分析で「中道右派から中道」というパターンの「左傾化」や「右傾化」現象が確認されたことは重視したい。

また、おそらく、このような多様な「左傾化」の姿は、そもそも現在の政治現象を「左傾化」と呼ぶ際の前提をなす「左か右か」という政治の捉え方そのものの再検討を迫るものとも理解できる。実際、われわれの言説空間においてたびたび姿を現す「左か右か」という政治現象の理解の仕方には、ネオ・リベラリズムの理解やその具体的方策をめぐる対立だけでなく、対米・対外資感情やそれと連動したナショナリズム、秩序維持における国家の役割、さらには民主主義の解釈やその実践、マイノリティーの権利の取り扱いなどをめぐる、次元の異なった多様な立場や対立軸が紛れ込んでおり、ともすれば「右か左か」というレッテルはそのようなさまざまな価値や利害の対立を矮小化してしまう恐れもある。

むしろ、本稿でこれまでなされてきた推察は、イデオロギー上の「右・左」という分類の有意性を所与として受け入れることで、「左傾化」を主張す

る立場と同じ出発点に立ち、その上で「左傾化」の実態把握がどこまで可能かを旨とした一試論にすぎない。したがって、近年のラテンアメリカ地域政治の「左傾化」の実態にさらに迫っていくためには、少なくとも、選挙や政党システムの制度化といった側面だけでなく、そもそも「左派」系候補者や「左派」政党を選び取った有権者の社会的属性や経済状況という構造的側面(インプットの側面)、そして、その結果生まれた「左翼政権」が実際に実施政策の具体的内容やその受益層およびそのパフォーマンス(アウトプットの側面)まで考慮される必要があるといえるだろう。(9月22日記)

注

(1) また、近年の選挙においては、「中道左派(CL) vs 個人主義(P)」や「中道右派(CR) vs 中道右派(CR)」といった対立図式も散見されることから、各々の選挙における争点、必ずしも明確に左右対立の軸に沿ったものではなかったという点もここで付言しておくべきかもしれない。

- (2) 本稿で「政党システム」とは、あるパターン化された方法に沿って相互作用するような諸政党の集合のことを指す。
- (3) この点については、以下のようなA.ヴァレンスエラによる指摘が示唆的である。つまり、「……市民たちが国家の首長こそが深刻な諸問題を解決してくれると期待しているにもかかわらず、大部分のラテンアメリカ民主制下の大統領はきわめて脆弱なのである。すなわち、彼らは「統治する」というよりも「君臨している」にすぎないのだ。…」(Valenzuela[2004, 12])
- (4) S.メインウェリングらはこれら二つの力に従って、ラテンアメリカ各国の大統領を以下の表Bのように類型化した。
- (5) まず、ある国のi番目の政党による議席占有率を P_i とすれば、有効政党数は以下のような公式で求められる。ただし、ここではM.クビッジの論文で示された政党数との比較から、現在でもたびたび利用されるターゲペラによる有効政党数(ENPS)の公式(以下)を使用した。

$$ENPS = \frac{1}{\sum P_i^2}$$

しかし、J.モリナルにより新たに考案された修正版の有効政党数(ENP)の公式(以下)の方が

表 B ラテンアメリカ各国大統領の力の多様性

憲法上の権限 (constitutional powers)	党派的な力 (partisan powers)			
	非常に低い	比較的低い	比較的高い	非常に高い
支配的	チリ エクアドル		アルゼンチン	ベネズエラ
事前関与的	ブラジル	コロンビア ペルー		
事後関与的		ボリビア	エルサルバドル ウルグアイ	ドミニカ
周辺の			コスタリカ パラグアイ	ホンジュラス メキシコ ニカラグア

(注) アミ掛けは「左派政権」の国。なお、近年いくつかの国で大統領権限の改革が行われており、表中「/」は権限が強化された国を、「\」は権限が縮小した国をそれぞれ示している。詳細についてはShugart[2000]を参照。

(出所) Mainwaring and Shugart[1997b, 432, Table 11.6]に筆者が加筆修正。

より現実と合致していると考えられるので、表2の下段にその数値も併記する。なお、以下の公式における P_i は議席数が最も多い政党の議席率である (Molinar[1991])。

$$ENP = 1 + ENPS * \left(\frac{\sum p_i^2 - p_i^2}{\sum p_i^2} \right)$$

- (6) このような「政策の穏健化」は、大統領選における決選投票 (majority runoff) システムによっても達成され得る。
- (7) 変易率 (V) は以下の公式で求められる (Roberts and Wibbels[1999, 575-580])。

$$V = .5 \sum |P_{i(t)} - P_{i(t-1)}|$$

- (8) メインウェリングらによる変易率の試算 (サンプルは1970年代後半から2003年までのもの) によると、例えば、スペイン16.5%、オランダ16.6%、フランス17.5%、日本18.6%、台湾18.7%、イタリア22.1%、韓国24.6%、インド25.5%、ハンガリー25.5%、チェコ25.7%などといった数値を示している (Mainwaring and Torcal[2005, 15, Table 1])。
- (9) なお、クピッジの研究では、このような「勝ち組」・「負け組」の議論の後に、両者の違いを生み出した「経済的インパクト」や「政党の組織構造」といった変数へと話が展開していくが、ここでは省略する。とはいえ、やはり彼が分析対象としなかった第Ⅱ期においても同様に「勝ち組・負け組」を生み出した原因についての分析が必要であるため、このテーマについては現在、別稿を準備中である。
- (10) 表からは読み取れないが、第5次共和国党 (MVR: ベネズエラ)、社会主義運動 (MAS: ボリビア)、国家統合社会党 (PSUN: コロンビア)、民主革命党 (PRD: メキシコ)、市民行動党 (PAC: コスタリカ) といったこれらの「勝ち組」新党は、概して、個人主義的な色彩の非常に強い政党であった。
- (11) R, CR, CL, L がそれぞれ、右派政党、中道右派政党、中道左派政党、左派政党に分類される政党の得票率の「総和」を指すとき、イデオロギー傾

斜度 (MLRP) は以下の式で求められる。

$$MLRP = R + .5CR - .5CL - L$$

$$mlrp = \frac{R + .5CR - .5CL - L}{100}$$

また同様に、とする時、イデオロギー分極度 (IP) は以下の公式で求められる。

$$IP = |1 - mlrp| * R + |.5 - mlrp| * CR + |-.5 - mlrp| * CL + |-1 - mlrp| * L$$

- (12) 表1の注(2)参照のこと。
- (13) したがって、これらの指標の値はそもそも各政党の「分類のされ方」に大きく依存するが、政党の分類については各国の専門家の方々からアドバイスをいただき、できるだけ厳密なものとなるよう心がけた。また、ここでは特に、近年の「左傾化」現象を目に見える形にするという本稿の趣旨にこだわって、この指標を使用することとした。クピッジ曰く「.....政党の分類が有効である限り、たとえいくらかの間違いがあっても、そもそも測ろうとすることは、まったく何も測ろうとしないよりもマシなのである。.....」 (Coppedge[1998, 565])

参考文献

- 恒川恵一[2004] 「民主主義の空洞化? 現代中南米における政治の意味について」 (『国際問題』 No.536, 11月)
- Castañeda, Jorge G.[2006] “Latin America's Left,” *Foreign Affairs*, May/June, pp. 28-43.
- Coppedge, Michael[1997] “A Classification of Latin American Political Parties,” Kellogg Institute Working Paper, No. 244.
- [1998] “The Dynamic Diversity of Latin American Party Systems,” *Party Politics*, Vol. 4, No. 4, pp.547-568.
- [2001] “Latin American Parties: Political Darwinism in the Lost Decade,” in Larry Diamond and Richard Gunther (eds.) *Political*

- Parties and Democracy*, Baltimore : Johns Hopkins University Press, pp.173-205.
- Dix, Robert H.[1989]“Cleavage Structures and Party Systems in Latin America,” *Comparative Politics*, Vol. 22, No.1, October, pp. 23-37.
- Klesner, Joseph L.[2005]“Electoral Competition and the New Party System in Mexico,” *Latin American Politics and Society*, Vol. 47, No. 2, pp.103-142.
- Madrid, Raul[2005]“Ethnic Cleavages and Electoral Volatility in Latin America,” *Comparative Politics*, Vol. 38, No.1, October, pp.1-20.
- Mainwaring, Scott[1999]*Rethinking Party Systems in the Third Wave of Democratization : The Case of Brazil*, Stanford : Stanford University Press.
- Mainwaring, Scott and Mariano Torcal[2005]“Party System Institutionalization and Party System Theory After the Third Wave of Democratization,” the paper presented at 101st Annual Meeting of the American Political Science Association, Washington, September 1-4.
- Mainwaring, Scott and Matthew Soberg Shugart [1997a]“Juan Linz, Presidentialism, and Democracy A Critical Appraisal,” *Comparative Politics*, Vol. 29, No. 4, pp.449-470.
- [1997b]“Conclusion : Presidentialism and the Party System,” in *Presidentialism and Democracy in Latin America*, Scott Mainwaring and Matthew Soberg Shugart(eds.) New York : Cambridge University Press, pp. 394-439.
- Mainwaring, Scott and Timothy R. Scully[1995] *Building Democratic Institutions : Party Systems in Latin America*, Stanford : Stanford University Press.
- Molinar, Juan[1991]“Counting the Number of Parties : An Alternative Index,” *The American Political Science Review*, Vol. 85, No. 4, pp.1383-1391.
- Petkoff, Teodoro[2005]“Las dos izquierdas,” *Nueva Sociedad*, No. 197, pp.114-128.
- Philip, George[2003]*Democracy in Latin America : Surviving Conflict and Crisis?*, U. K., Cambridge : Polity Press.
- Roberts, Kenneth M.[2002]“Social Inequalities Without Class Cleavages in Latin America’s Neoliberal Era,” *Studies in Comparative International Development*, Vol. 36, No.4, pp. 3-33.
- Roberts, Kenneth M. and Erik Wibbels[1999]“Party Systems and Electoral Volatility in Latin America : A Test of Economic, Institutional, and Structural Explanations,” *The American Political Science Review*, Vol. 93, No. 3, pp. 575-590.
- Shugart, Matthew Soberg[2000]“Towards A Representation Revolution : Constitutional Reform, Electoral Systems, and the Challenges to Democracy in Latin America,” the paper prepared for the conference “Challenges to Democracy in the Americas,” The Carter Center, Atlanta, Georgia, October 16-18.
- Smith, Peter H.[2005]*Democracy in Latin America : change in comparative perspective*, New York, Oxford University Press.
- Valenzuela, Arturo[2004]“Latin American Presidencies Interrupted,” *Journal of Democracy*, Vol. 15, No.4, pp.5-19.
- Valenzuela, Arturo and Linz, Juan(eds.) [1994] *The Failure of Presidential Democracy : Comparative Perspectives*(Vol.1), Baltimore : Johns Hopkins University Press.

(うえたに・なおかつ / 地域研究センター研究員)